

第3節 高島多米治と余山貝塚

1. 高島多米治と下郷コレクション

大阪歴史博物館に収蔵される下郷コレクションは縄文時代の採集資料を中心としたコレクションであり、高島多米治という人物が蒐集した資料群を核としている。高島は1866年（慶応2）に福井県に生まれ、若くして渡米、歯科医の資格をアメリカで取得した後、1902年（明治35）に帰国する。翌年には東京人類学会の会員になり、その後関東近辺の貝塚への遠足会などに参加するとともに、独自に採集活動を開始した。茨城県椎塚貝塚や福田貝塚においての頻繁な採集活動、さらに自身の蒐集品を展示するための展覧会開催などの活動記録が当時の学会誌に掲載されており、貝塚採集品を大量に蒐集したことで知られる。

しかし、1922年（大正11）に突如としてその蒐集品を売却、その後の採集活動も完全に途絶えてしまう。高島の蒐集品を購入したのは、滋賀県長浜に所在した財団法人下郷共済会であった。この法人は1921年に鍾秀館という展示施設を開館させており、そこで縄文時代の展示をするために購入したのだろう。戦後そのコレクションも売却され、含まれていた高島蒐集品はついに散逸してしまう。現在大阪市が所蔵する下郷コレクションはその際に購入されたもので、当館以外にも辰馬考古資料館や天理参考館などが旧高島蒐集品を所蔵していることが知られている。

2. 高島と余山貝塚

高島多米治が余山貝塚を訪れたのは、「貝塚叢話」という自身の手記によって、1908年（明治41）から1909年であったことがわかっている〔高島1909〕。数度にわたって当地を訪れ、大量の出土品や人骨を手にした。

余山貝塚では高島が訪れる以前から多くの好事家や研究者が採掘を行っていた。特に、当時さかんに採集活動を行っていた水谷幻花と江見水蔭はこの地で数度にわたり採掘を実施している。以下は、高島の「貝塚叢話」と江見水蔭の著作『地中の秘密』〔江見1909〕を中心に、高島以前の余山貝塚における踏査歴を書き出してみたものである。

（明治？年）		西川某により発見
（明治？年）		野中完一
1904年（明治37）	11月	和田千吉
1905年（明治38）		坪井正五郎（人骨；下顎骨や大腿骨など）
1906年（明治39）		水谷幻花・大野市平（人骨発見）
1907年（明治40）	8月	水谷幻花（人骨1体発見）、吉野長太郎
同	9月29日～10月1日	江見水蔭（年内に数回）
同	10月	大野雲外
1908年（明治41）	2月24日～26日	江見水蔭
同	3月13日～16日	江見水蔭
同	8月2日～5日	江見水蔭
同	8月2日～10日	水谷幻花・高島多米治（人骨1体）
1909年（明治42）	2月1日～4日	江見水蔭
同	2月	高島多米治（人骨1体）
同	3月	高島多米治（人骨1体）
同	4月	高島多米治（人骨2体、人骨4体、合計6体）
同	8月7日～8日	高島多米治（人骨5体）

このほかにも地元の住民による採掘（主に貝殻の採取が目的）などが行われていたらしい〔江見 1909、酒詰 1962〕。本格的な調査は、1940 年（昭和 15）の酒詰仲男を中心とした東京大学人類学教室によるものを嚆矢とする。

履歴を一瞥してまず目を引くのは、高島の来訪頻度である。1908～1909 年、高島は茨城県福田貝塚や椎塚貝塚でも頻繁な採集を実施、それに加えての余山踏査であった。また自身のコレクションを展示会に出品するなどの活動も併せて行っており、この時期の高島は考古学（あるいは遺物蒐集）へ情熱を傾けていたことがわかる。

さらに、高島が合計 14 体分の人骨を発見したことも注目される。おそらく、高島は歯科医師であったためにそれまでに参加した堀之内貝塚や加曽利貝塚の見学会での人骨発見に触発され、自身の専門との関係から出土人骨を強く意識していたことは想像に難くない。したがって、高島が余山を訪れた主な目的のひとつに人骨の発見・採集があったとみてよいだろう。

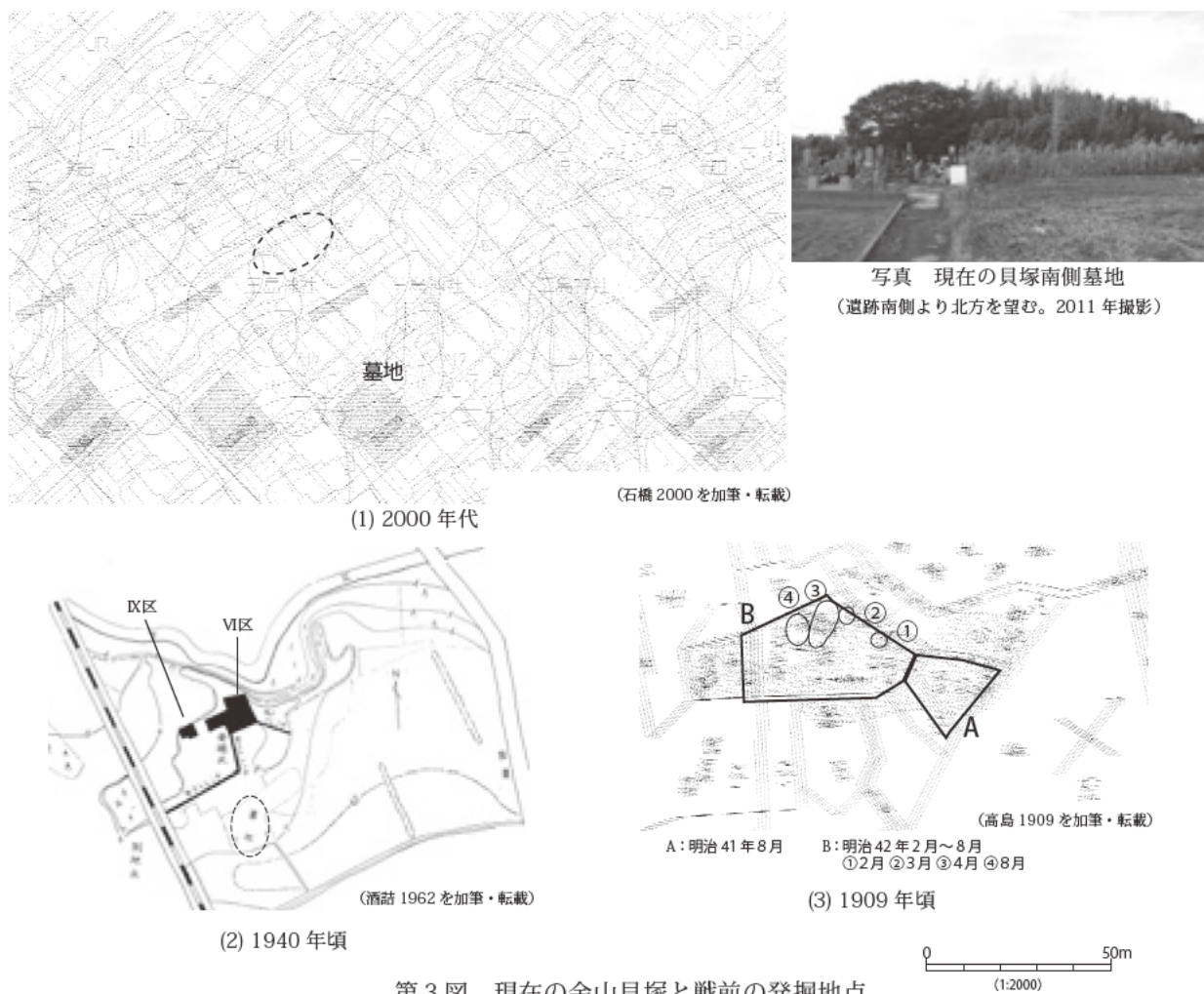
高島は、余山貝塚で発見した人骨のうち 5 体分を東京帝国大学人類学教室の小金井良精に寄贈したと記している〔高島 1909；p.228〕。小金井自身も「十数体の骨格」を「同氏の好意により全部」手元においていると述べており〔小金井 1923；p.27〕、最終的に高島は小金井へ人骨全てを寄贈したのだろう。近年、水嶋崇一郎・久保大輔らは現在東京大学総合研究博物館が収蔵する縄文時代人骨のデータベース作成に際し報告を行った〔水嶋・久保 2007〕。それによれば、余山貝塚関連の人骨（以下東大余山人骨と略称）のうち 5 体分において、受入時期を 1909 年の 2 月および 3 月とする日付メモが付されている。ただし、これらが高島が寄贈したと述べている人骨 5 体に確定できるかというところ単純ではない。東大余山人骨の内訳を見ていくと、明治期のものとしては全部で 27 標本、そのうち高島が採集者と指定されているものは 20 標本となる。人骨標本には小金井良精に由来する番号（KG 番号）が付与されているものがあり、高島採集標本の 20 件のうち 12 件にはこの KG 番号を確認できるが、寄贈時期が記されたメモをもつ標本のうち 2 件ではこの KG 番号がついていないなど、当初から 14 体全てに KG 番号が付与されていたのか否か判然としない。その上、当初 1 個体で受け入れたものが離合集散さらには日付メモが遊離して別標本へ付与されたといった可能性も残る。

とはいえ、少なくとも数の上からは東大余山人骨の中に高島が発見採集した人骨がすべて含まれているとみてよく、そのうちの 5 体分については 1909 年 2 月と 3 月という、高島の余山採集直後の寄贈であったことがわかる。なお、1908 年 8 月に水谷と採掘した人骨については、不明な点があるようだが、東大人骨の標本番号 132387 が該当する可能性がある〔水嶋・久保 2007；p.16〕。

3. 高島が採掘した地点

高島の採掘地点を探る上で手がかりとなるのは「貝塚叢話」に所収される挿図（第 3 図－3）および、1940 年に酒詰仲男と和島誠一による発掘調査の成果（第 3 図－2。以下酒詰図と略称）である。そのなかで定点になるのは両図にみえる「墓地」と道（それぞれで「縣道」「国道」と表記）だが、しかし、これらを現在の余山貝塚周辺地図（第 3 図－1）〔石橋 2000；p.837〕と重ね合わせても、各図は一致せず、厳密には高島採掘地点を確定することは困難である。

とはいえ、三つの図の比較により、大まかな相同は確認でき、その結果、高島採掘地点（1909 年 2 月）は高田川南側斜面の上縁部、現在でも周辺水準で最高地点に近い場所に相当すると推測される。人骨を多く発見した 1909 年 4 月と 8 月の採掘地点は、そこからやや西北に位置したと類推される。と同時に、酒詰の調査範囲との関係でいえば、前者（1909 年 2 月の地点）を調査範囲の最高地点である



第3図 現在の余山貝塚と戦前の発掘地点

北部（Ⅵ区付近）に、また後者（明治42年4月の地点）をもっとも西寄りのⅨ区付近に比定することができる。また、酒詰の調査成果を加味すると、高島（および当時の採集家）が採掘した場所は主要貝層だったことが窺われ、採集品の豊富さとも符合する。

4. 蒐集品について

高島が余山貝塚で採集した資料は、土器は杉山寿栄男の『日本原始工芸』[杉山 1928]、骨角器は岸上鎌吉「Prehistoric Fishing in Japan」[K. Kishinouye 1911]などで活用されたことが確認できる。特に岸上の論文は、高島や江見など蒐集家の採集品を多用しており、当時の情報共有のありようを知る上で貴重である。ただし岸上論文においては現存する資料との間に齟齬もある^{〔註1〕}。

また、本書第6表にあげた骨角器のリストにあるように、一部の個体には「40十四号カ」などのような注記^{〔註2〕}が遺跡名と併記されており、これが和暦年号（おそらく明治40年）を示すものだとすれば上掲した高島自身の活動履歴と一致しない。確証はないものの、この注記を持つ個体は余山を訪れたことがある高島の知人水谷幻花蒐集品であった可能性が浮上する。

5. 他機関が所蔵する高島蒐集品

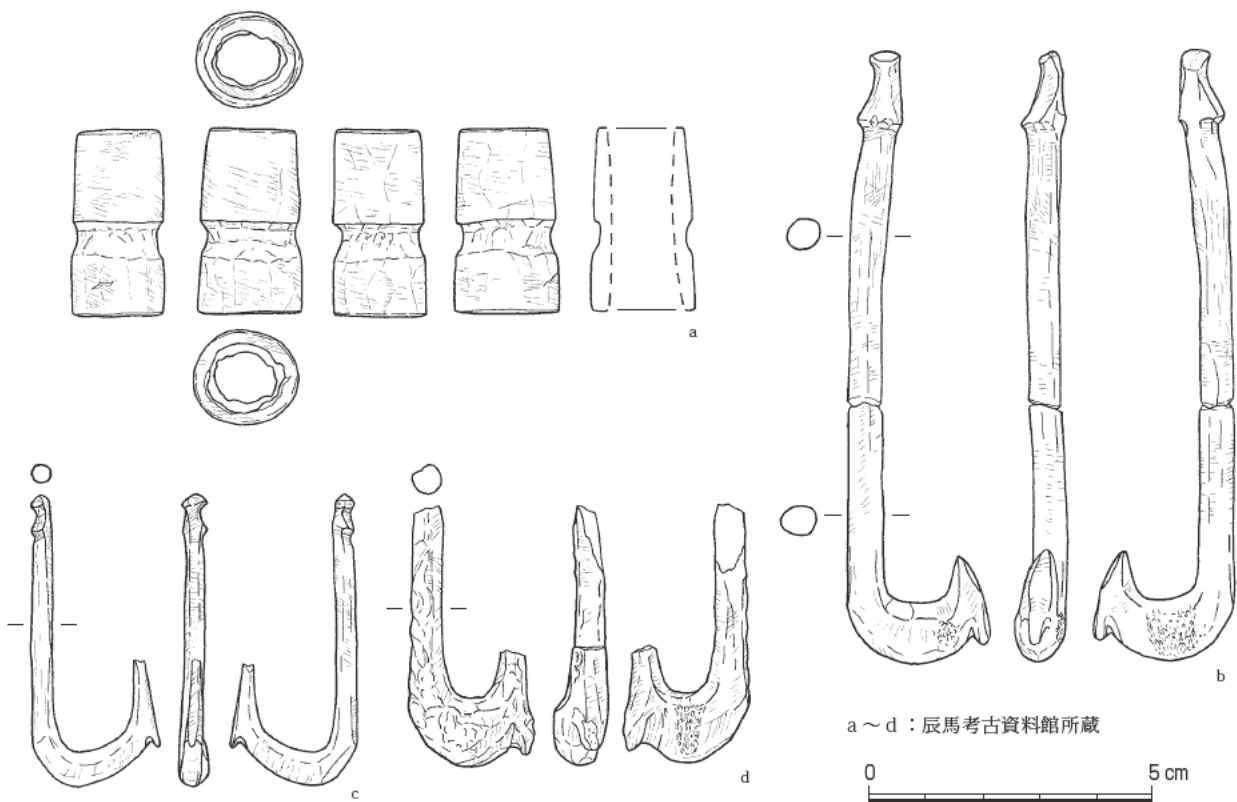
①辰馬考古資料館所蔵品（第4図）

兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館で所蔵する余山貝塚出土品は深鉢2点、浅鉢1点、土偶1点、骨角器5点を数える。調査は骨角器について行った。器種構成は弭形角器1点（第4図a）、釣針4点となる。釣針（b）は破片2点がかつて接合されていた痕跡を持ち、実際に破断面もほぼ適合することから同一個体と考えられる。ただし基部と湾曲部のねじれが見られることから、別個体破片を接合するために破断面の調整が施された可能性も捨てきれない。軸部をふくめてやや太い印象を与えるが、加工は丁寧で完成品とみてよい。残りの釣針のうち1点は完形品（c）、残りは未成品（d）となる。dの完成品とよく似た形状のものは大阪歴史博物館所蔵品のほか東京国立博物館所蔵の余山貝塚出土品でも確認できる〔金子ほか 2009；p.73〕。

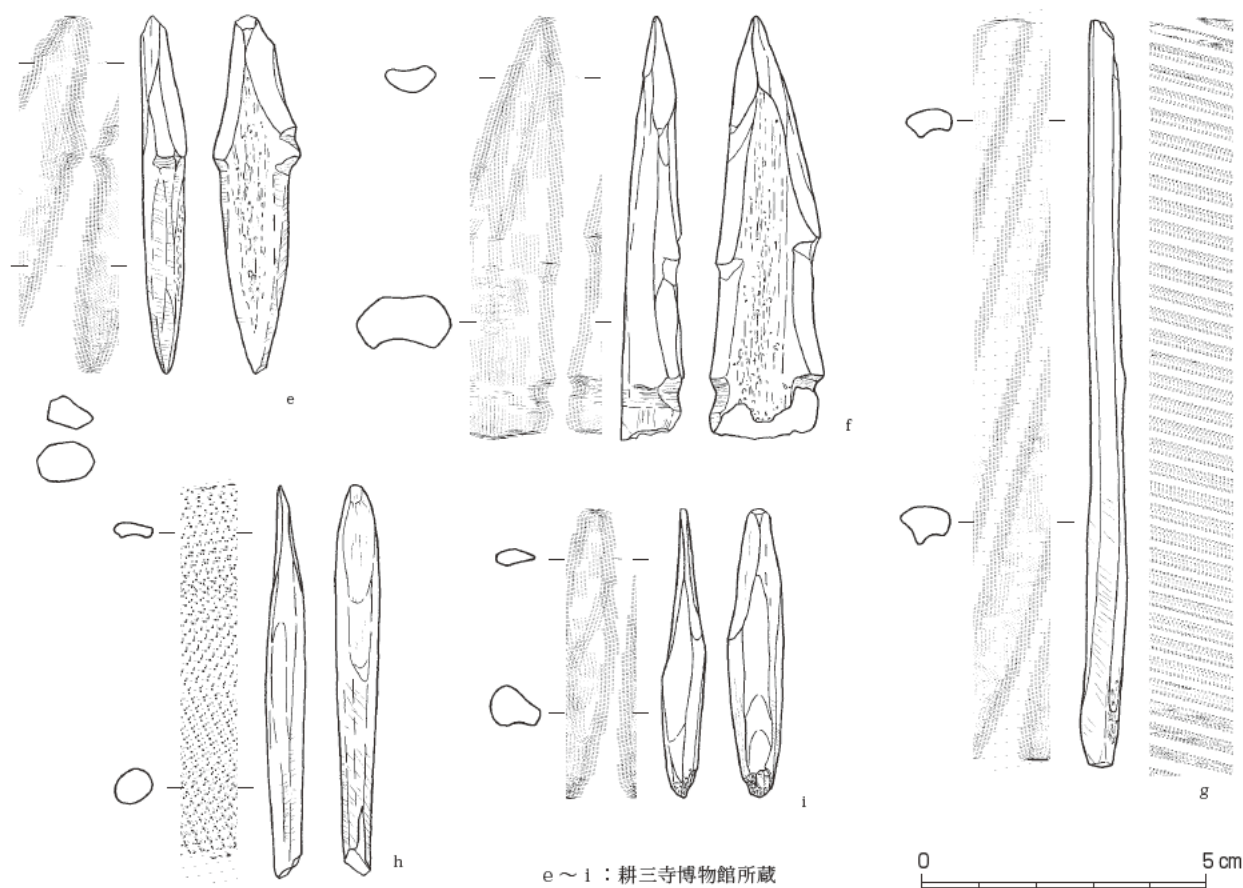
② 耕三寺博物館所蔵品（第5図・第1表）

広島県尾道市に所在する耕三寺博物館で所蔵する余山貝塚出土品はすべて骨角器（非加工物含む）で、50点を数える（第1表）。今回、すべての個体で下郷コレクションと同様の注記を確認できたことから、高島蒐集品の一部とみなしておく。所蔵機関での管理情報からは入手した時期や経過などを確認することはできなかったが、他の所蔵品との関わりからはおそらく戦後間もなくに購入されたものと考えられている^{〔註3〕}。銚頭9点、ヤス状刺突具25点、釣針11点、棒状製品1点がある^{〔註4〕}。ヤスの数が突出しており、中には大型の破損品もみられたが（g）、再加工品（h・i）が多い。また、単純銚頭も先端を再加工したもの（e・f）が含まれていた。

辰馬考古資料館は高島蒐集品のなかでもいわゆる珍品・優品を多く所蔵する機関として知られている〔加藤 2012〕。他方、耕三寺博物館所蔵品は、ヤス状刺突具を多く含むことなどから一定の選択



第4図 他機関所蔵の高島採集品 (1)



第5図 他機関所蔵の高島採集品(2)

第1表 耕三寺博物館所蔵余山採集品一覧

(単位: mm)

	遺跡名 注記	数字 注記	その他	器種・ 名称	残存状況	長さ	幅	厚さ	備考	図中 番号
1	余山	-	-	銚	基部欠損	(83)	(21.6)	(11.7)	加工の条痕明瞭。再加工。	f
2	余山	-	-	銚	先端付近	(62.5)	(17.2)	(7.7)		
3	余山	-	-	銚	先端	(45.5)	(16.1)	(8.5)		
4	余山	-	-	銚	先端付近～中位	(58.2)	(19)	(9.9)		
5	余山	-	-	銚	先端付近～中位	(78.7)	(16.8)	(9.3)	未成品か。	
6	余山	-	-	銚	基部	(69.3)	(20)	(10.7)	鹿角表面の風合い残る。削痕明瞭。完成品。	
7	余山	-	-	銚	基部	(69.7)	(17)	(9.2)	再加工	e
8	余山	-	-	銚	基部	(47.2)	(15.6)	(9.6)		
9	余山	-	-	銚	基部	(58.2)	(18.5)	(9.3)		
10	余山	-	-	ヤス	先端欠損	(147)	(10.9)	6.7	破断面は摩滅。	g
11	余山	-	-	ヤス	先端と基部端を欠損	(137.7)	10.1	7.8		
12	余山	-	-	ヤス	先端欠損	(132.6)	10.9	8.9		
13	余山	-	-	ヤス	中位～基部	(105.8)	11.9	9.6	再加工 (ただし再び破損)	
14	余山	-	-	ヤス	中位～基部	(105)	9.3	6.9	再加工 (ただし再び破損)。元は端部付近の成形か。	
15	余山	1054	-	ヤス	中位～基部	(100.1)	(11.4)	8.7	再加工か。	
16	余山	-	-	ヤス	中位～基部	(100.8)	(11)	8.9	風化? (表面の剥離)	
17	余山	-	-	ヤス	先端と基部端を欠損	(108.1)	(9.6)	7.7	残存長から推測すると再加工か。	
18	余山	-	-	ヤス	先端～中位	(107.4)	(8.9)	4.1	扁平	
19	余山	-	-	ヤス	先端～中位	(105)	(8.7)	(7.7)		
20	余山	-	-	ヤス	先端～中位	(98.9)	(9.6)	(5.8)		
21	余山	1054	40 十二号	ヤスカ	先端付近～基部	(72.1)	(7.2)	(6.6)	再加工か。「1054」の注記だけ墨が濃い。断面円形。	
22	余山	-	-	ヤス	基部端欠損	(79.6)	(8.6)	(7.3)	再加工。基部付近は擦痕が粗いためか、濃く変色して見える。	
23	余山	-	-	ヤス	基部	(80.8)	(11.8)	(9.4)	再加工 (ただし再び破損)	
24	余山	1054	-	ヤス	先端欠損	(84.8)	(11.4)	5.5	再加工。扁平。	
25	余山	-	-	ヤス	先端欠損	(90.2)	(10.6)	(8.1)	再加工。	
26	余山	-	-	ヤス	先端付近～基部	(87)	(10.7)	(7.8)	再加工。	
27	余山	-	-	ヤス	中位?～基部	(86)	(9.7)	(7.5)	再加工か (破断面摩滅)	
28	余山	1054	-	ヤス	先端欠損	(83.3)	(11.4)	(7.4)	再加工	

	遺跡名 注記	数字 注記	その他	器種・ 名称	残存状況	長さ	幅	厚さ	備考	図中 番号
29	余山	-	-	ヤス	先端付近～基部	(91)	13	(7.7)	再加工か（破断面摩滅）。	
30	余山	-	-	ヤス	先端欠損	(77.3)	(9.2)	(7.1)	再加工。	
31	余山	-	-	ヤス	基部端欠損	(81.8)	(9.8)	(8.5)	再加工。	
32	余山	1054	-	ヤス	基部端欠損	(76.3)	(8.2)	(7.3)	再加工。断面円形基部をもつヤスの破損先端を再加工。	h
33	余山	-	-	ヤス	先端欠損	(75.9)	(9.9)	(7.3)	再加工か（破断面摩滅）。	
34	余山	-	-	ヤス	先端欠くのみ（ほぼ完形）	(56.1)	(10.8)	(7.8)	再加工。再加工後の形態がほぼ完存。ただし再加工は繰り返されたかもしれない。	i
35	余山	-	-	釣針	※	(65.1)	※ 24.5	(7.8)	※先端と基部端が欠損するが、別個体の接合。厚さは湾曲部で計測。軸部は 5.3mm × 5.2mm。	
36	余山	-	-	釣針	軸部～湾曲部	(67.6)	(15.7)	(8.5)	軸部は 5.5mm × 5.3mm	
37	余山	-	-	釣針	基部	(42.7)	5.5	5.3	幅×厚は軸部。	
38	余山	-	-	釣針	基部	(40.8)	4.4	5.2	幅×厚は軸部。	
39	余山	-	-	釣針	基部～軸部	(66.7)	5	5.7	幅×厚は軸部。	
40	余山	-	-	釣針	基部～軸部	(42.7)	4.7	4.9	幅×厚は軸部。	
41	余山	-	-	釣針	軸部	(75.5)	5.6	5.4	幅×厚は軸部。鹿角にしては組織が緻密。	
42	余山	-	-	釣針	軸部	(43.7)	5.1	5.4	幅×厚は軸部。	
43	余山	-	-	釣針	軸部～湾曲部	(37.7)	4.8	5.5	幅×厚は軸部。湾曲部を縦方向に破損している。	
44	余山	-	-	釣針	軸部～湾曲部	(29.9)	6	5.7	幅×厚は軸部。	
45	余山	-	-	釣針	軸部～湾曲部	(30.9)	4.1	4.3	幅×厚は軸部。	
46	(余カ)山	-	-	針か	先端部	(53.2)	5.5	5.6	やや湾曲することから、釣針基部の可能性もあり。	
47	余山	1085	-	非加工	-	(42.3)				
48	余山	-	-	非加工	-	(39.7)				
49	余山	-	-	非加工	-	(88)			骨片	
50	余山	-	-	非加工	-	(62.7)			骨片	

的な視点が介在していたことを連想させるものの、その対象からはすでに珍品・優品が選り取られていた様子がうかがわれた。

（加藤俊吾）

【註】

- （１）穿孔のある魚骨〔前掲書；Fig133〕は、余山出土と紹介されている〔前掲書；p.366〕が、実物には「椎塚」の墨書注記が残されており錯綜している。
- （２）当館所蔵の標本番号 51 など。なお、この注記をもつ個体は、遺跡名注記の筆致も似ていることから同一人物によって遺跡名が注記されたとみてよいだろう。ただし、年号（？）注記と遺跡名注記の筆致については判断できなかった。
- （３）同館学芸員吉田守氏のご教示。なお同館には余山貝塚以外にも「福田」「瀬澤」「宮戸」といった、下郷コレクションと同様の墨書注記をもつ骨角器があわせて所蔵されている。このことから高島蒐集品であったとの見方は首肯されよう。
- （４）『瀬戸田町史』によれば、銚 9 点、ヤス状刺突具 27 点、釣針 11 点、鹿角 2 点と報告されている〔瀬戸田町教育委員会 2001〕。

【引用・参考文献】

- 石橋宏克 2000 「余山貝塚」『千葉県歴史 資料編 考古 1（旧石器・縄文時代）』財団法人千葉県史料研究財団；pp.836-843
- 江見水蔭 1909 『探検実記 地中の秘密』博文館；pp.105-262
- 加藤俊吾 2012 「辰馬考古資料館および天理参考館所蔵の福田・椎塚貝塚関連資料」『共同研究報告書 6 —「高島多米治と下郷コレクションについて」（福田貝塚・椎塚貝塚）—』大阪歴史博物館；pp.30-35
- 金子浩昌・松浦有一郎・望月幹夫 2009 『東京国立博物館所蔵骨角器集成』東京国立博物館
- Kamakichi Kishinouye 1911 'Prehistoric Fishing in Japan', JOURNAL OF THE COLLEGE OF AGRICULTURE, vol II .11 no.7, Imperial University of Tokyo（『東京帝国大学農科大学紀要』第 2 巻第 7 号）
- 小金井良精 1923 「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』第 38 巻第 1 号 東京人類学会；pp.25-48
- 酒詰仲男 1962 「千葉県余山貝塚発掘調査概報（前篇）」『人文学』第 62 号 同志社大学人文学会；pp.88-106
- 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』（1976 復刻発行 北海道出版企画センター）
- 瀬戸田町教育委員会 2001 「三 骨角器」『瀬戸田町史』耕三寺編 pp.270-274
- 高島唯峰 1909 「貝塚叢話」『考古界』第 8 編第 5 号 考古学会；pp.227-230
- 坪井正五郎ほか 1905 「銚子紀行」『東京人類学会雑誌』第 20 巻第 233 号 東京人類学会；pp.474-488
- 水嶋崇一郎・久保大輔 2007 『縄文時代人骨データベース 4』千葉県の遺跡（向ノ台、矢作、余山など）『東京大学総合研究博物館標本資料報告第 69 号 東京大学総合研究博物館